

大学全入時代に向けて ますます特色ある 学園づくりを

総長再任にあたって

大谷 實 総長に聞く



大谷 實 (同志社総長)

1934年生まれ。1960年同志社大学大学院法学研究科修士課程修了。法学部専任講師、助教授を経て1973年に教授。法学部長、大学院法学研究科長、大学院総合政策科学研究科長、大学長を歴任、2001年4月から総長。また学外においても、司法試験審査委員、法務省人権擁護推進審議会委員(財)京都犯罪被害者支援センター理事長などを務め、犯罪被害者の支援活動をする。主な著書に、「いのちの法律学―刑法講義総論・各論」などがある。

学校法人同志社の総長に大谷實総長が再選され、4月1日から4年間、同志社の運営を託すことになりました。これを機に大学文学部卒業生の堀田真由美さん(京都新聞記者)が大谷総長を訪ね、2期目にあたり学園運営にかける新たな意欲を語っていただきました。

果たされた3つのマニフェスト

堀田 1期目の4年間について、ご自身ではどのように評価しておられますか。

大谷 4年前の就任当時、私のマニフェストは大別して3つありました。「協調と融和」を学園運営のモットーとすること、同志社らしい学校にすること、そして中学校の岩倉への移転と中学校・高等学校の統合です。

一つ目については、学園全体に対立の構図があったため、他大学では時代の変化に合った学部を次々に新設していったにもかかわらず、同志社大学には長らく新しい学部を設置することができませんでした。この状況を早く解消させ、協調と融和を旨とする学園にするのが私の目標の一つでした。二つ目については、同志社には中学校と高校が各4校と幼稚園がありま。これらの学校で行われる教育が大学、女子大学と結びつくことが望ましいわけですが、少子化、大学全入というこれからの難しい時代、同志社らしい学校を展開するためには一貫教育体制のさらなる充実が必要です。ところが同志社には小学校が

なく、幼稚園と中学校との間が連続していない。本当の意味での一貫教育になっていなかったのです。三つ目の中高の移転・統合については30年ほど前から計画があり、理事会でも決定していたのですが、これもなかなか実現しなかった。他の中・高校とは違い、中学と高校は校長が別、経営権や人事権も別で独立採算制です。これを一本化するのも課題の一つでした。

堀田 小学校構想はいつからあったのですか。

大谷 もともと新島先生は小学校も作りたかったのです。同志社創立125周年の時に小学校設立構想委員会ができましたが、開設決定までには至りませんでした。そのような時期に私が総長に就任しましたので、小学校の必要性を説き、同志社の建学の精神に満ちあふれた、生き生きとした学校を育てたいということをお願いしてきました。情操教育にとつて最も重要なのは幼稚園の4〜5歳から小学校4年生頃の時期まで。したがって、幼稚園と小学校を連動させることにより、小学校から育つた人たちが同志社の中核メンバーになっていくというのが



堀田真由美 (京都新聞記者)

1981年生まれ。2004年4月、大学文学部社会学科新聞学専攻を卒業。ゼミでは渡辺武達教授の指導を受け、メディアリテラシーやメディアと社会的倫理などについて学ぶ。卒業と同時に京都新聞社へ入社。現在、園部支局で町政などを担当。

私の理念です。そこで就任早々から準備を整え、小学校は無事に来年開校の運びとなりました。これらのことを何とか1期目に成し遂げられました。皆さんが力を合わせて取り組めたことが、成功の最大要因だと思っています。

小学校から同志社精神の育成を

堀田 2期目の目標をお教えてください。

大谷 中学の移転は2010年に実施されることが決定しましたが、高校との統合は今後の課題です。附属小学校は大学が責任者となって作り上げていくことになりましたが、私の夢でもありましたので、これにも力を注ぎたいと思っています。高校も新しい時代に相応しいものとなり、それぞれ、是非とも立派な学校に育ってほしいですね。本当は新島先生も望んでおられたように、同志社大学に医学部を作りたいのです。いま新たに設置するのは文部科学省の方針もあり難しいですが、将来的にはぜひ実現させたい。その第一段階として、今年女子大に薬学部が設置されたのは非常に嬉しいことです。

再来年、大学は全入時代を迎えます。同志社が潰れることはまずないだろうと皆さん思っています。同志社が潰れることは大学は簡単に潰れますよ。学生が収容定員の50%を切れば補助金もつかなくなる。10年前、本学に総合政策科学研究科が誕生しましたね。当時は非常に多数の応募がありましたが、来年は京都大学が公共政策大学院の設置を予定しており、完全に競合することになります。こうした競争にいかにか打ち勝つかも課題です。

同志社ではキリスト教を徳育の基本としていますが、本当にそれで一貫してやっていけるのだろうかという懸念もありました。いわゆる偏差値の高い大学ほど、各大学に特色がなくなってきた時代です。同志社でいえば新島精神、慶應義塾大学なら福沢精神といふべき校風が希薄になってきている。教育産業が右肩上がりの時代はそれでもよかったです。少子化によって私立学園の経営は徐々に難しくなってきました。たとえば共学や4年制大学に進学する女性が増えた結果、女子短期大学の存続が各地で危ぶまれています。そこで同志社でも、2000年には短期大学部を廃止すると同時に現代社会学部を作りましたね。このような改革を続けてきましたが、同志社にもどんな特色、アイデンティティーを持たせるのか、一貫教育と言いますが、何を一貫して教育するのかを考え直す必要があります。

それには良心碑に刻まれた新島先生の言葉にもあるように、建学の精神を再度きつちりと捉え直さなければ。最近はや学協同が幅広く行われていますが、まず大学は教育・研究が最優先されるべきだと思います。産業界と連携しても、教育・研究のレベルが低ければ意味がないわけですから。そして40万人もの卒業生のご協力を是非いただきたい。歴史と伝統ある同志社は数々の優秀な人材を輩出してきたのですから、この人的財産をもっと利用させていただきたい。私は地方の同窓会支部や校友会支部の会合によく行きますが、卒業生の皆さんは本当に同志社が好きなんだということを感じます。

堀田 卒業生の方々が愛着を感じている同志社精神とは、つま

り何なのでしょう。

大谷 仰いで天に恥じず、伏して地に恥じない。モラルに恥じない生き方を満足を覚える、死ぬ間際まで希望をもって前向きに生きる。それが同志社精神です。卒業してある程度歳月を経ると、私たちは人間のあるべき生き方の中にこの同志社精神を見出し、共感を覚えるのではないのでしょうか。

堀田 同志社精神を育てるために、具体的に学内で行われていることはありますか。

大谷 同志社一貫教育推進委員会という全学的組織を作り、理念、実現方法を検討しています。同志社の教育理念は3つあると言われてきました。キリスト教主義、自治自立主義、国際主義。設立当時の同志社はミッション・スクールでした。しかし布教が目的ということはアメリカンボードから干渉を受けることになり、新島先生はこの問題に非常に苦しめられたといいます。そして1888年に同志社大学設立の旨意を書いた時、「同志社は布教をするところではない。キリスト教は青年を強くする基本である」とされました。いま千数百人いる教職員中、クリスチャンは1割に届きません。したがって、キリスト教を生き方のすべてにしなさいと言っても説得力がない。では、キリスト教というものを抜きに良心教育をするためにはどうすればいいのか。そこで呼びかけていきたいのが、人間の尊厳を前面に出した生き方であり、共生や人道主義であり、グローバルスタンダードに合った生き方であるわけです。これらを小学校のうちに、しっかりと教えていきたいと思っています。大学全入時代へ向けての、これは全同志社の課題です。

法学部の発展に尽力して40年 学生には気概を持って活躍してほしい

堀田 法学部在職40年にあたり、教育や研究の思い出をお聞かせください。

大谷 私が同志社の教員になったのは1965年、30歳のとき。今年で70歳、3月で定年を迎えました。私が専任講師になった頃は法学部では政治学が強く、法律の方はまだあまり有名ではありませんでした。そこで現在ロースクールで教えておられる同級生の藤倉皓一郎先生と「世間における同志社大学法学部の認知度をもっと高めよう」と励まし合ったものです。そのためにはもともと中央、全国区で仕事をしなければいけない。当時は関東で同志社の名を言ったら「どんな会社か」と聞かれましたからね(笑)。以降、私は司法試験の委員、法制審議会、日本学術会議といった中央の仕事をしようと努め、これを実現させることができました。おそらく私立大学では初めて刑法の試験委員の責任者になり、法制審議会では刑事法部会の部会長を4年務めました。これはやり甲斐がありましたね。私の弟子たちも優秀な人たちがばかりで、このような伝統ができれば、後ほとんどん発展しますよ。

堀田 学外のお仕事も非常にたくさんしてこられたんですね。その中でも同志社らしいお仕事とは何ですか。

大谷 犯罪被害者を救う活動です。これは30年以上前に提唱し、ずっと社会にアピールしてきました。現在は京都犯罪被害者支援センターと日本被害者学会の、それぞれ理事長をしています。

